

モモにおけるカイガラムシ対策

和歌山県かき・もも研究所

【はじめに】

モモを加害するカイガラムシ類の代表としては、ナシマルカイガラムシ（図1）、ウメシロカイガラムシ、クワシロカイガラムシ（図3、図4）の3種が挙げられます。ここでは、上記3種の発生生態および防除対策について紹介します。

【ナシマルカイガラムシ】



図1 多発したナシマルカイガラムシ

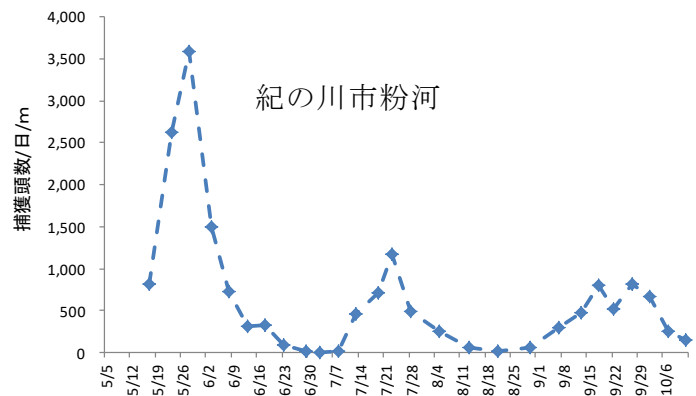


図2 ナシマルカイガラムシの発消長

○生態

- ・本県のモモ園地では、近年ナシマルカイガラムシが増加傾向にある。
- ・歩行幼虫は0.2 mmと非常に小さいうえ、介殻の色が樹皮の色と似ており、多発するまで発生に気付きにくい。
- ・卵胎生で繁殖し、ふ化した1齢幼虫はしばらくメス成虫の介殻下に留まったのち歩行を開始し、適当な場所に固着する。
- ・本県のモモ園地では年3回のピークが確認されているが（図2）、歩行幼虫は晩秋までダラダラと発生し続ける傾向がある。

【ウメシロカイガラムシ、クワシロカイガラムシ】



図3 メス成虫



図4 加害により枯死した枝

○生態

- ・両種のふ化幼虫は、枝上を歩行、あるいは風に乗って移動分散する。
- ・メスは3齢幼虫を経て成虫になる。
- ・オスは2齢幼虫を経て繭をつくり、成虫が羽化する。
- ・オス成虫は翅を持ち、飛翔してメスを探索する。
- ・これら雌雄の成虫が出会い、交尾し産卵するというサイクルを、暖地では年3回、寒冷地では年2回繰り返す。

【防除方法】

上記3種の成育期の防除適期は、1齢幼虫発生時期の数日間と非常に短いことが知られている。これは、幼虫の発育に伴い体表面がロウ物質で覆われ、薬剤による防除効果が不十分となるためであり、このことが防除を難しくしている。このため、効率的に防除するためには、1齢幼虫発生時期を正確に把握することが重要となる。

当研究所では、モモ産地におけるウメシロとクワシロのふ化幼虫発生盛期を予測する技術を実用化し、防除適期の情報提供を行っている。普及機関やJAの発信する情報を参考に登録薬剤を散布して頂きたい。

また、休眠期のマシン油乳剤とアプロード水和剤の混用散布も次世代の密度を低下させる効果がある。

【おわりに】

和歌山県紀の川市における各種の1齢幼虫の発生盛期は年によってバラツキがあるが、おおよそ表1の通りであるので防除の参考にして頂きたい。

表1 モモ寄生カイガラムシ類の成育期における防除適期

カイガラムシ類	第1世代	第2世代	第3世代
ウメシロ	4月第6半旬	7月第1半旬	9月第3半旬
クワシロ	5月第2半旬	7月第4半旬	9月第4半旬
ナシマル	5月第6半旬	7月第5半旬	9月第6半旬